「また、死んじゃったよう」

うめく「生」 アフリカ赤道直下から ——1

小さな手に 母送る砂

エイズ感染 20、30歳代で4人に1人

生きたい、生きたいと願いながら、命がうめいていた。母と子を襲う理不尽な死が、すぐそこにあった——毎日新聞社と毎日新聞社会事業団の「飢餓・貧困・難民救済キャンペーン」取材で赤道直下のアフリカを巡り、エイズ、内戦禍にあえぐ人々に出会った。阪神大震災の際に寄せられたアジア・アフリカからの救援の「お返し」にと今、ネパールで病院づくりが緒についている。今度はアフリカに、その友情を広げてみたい。【文・小倉孝保、写真・玉置勝巳】

サラーちゃんの母のひつぎが埋められた。……こらえていた涙があふれ出した ＝ゴグゥエで

母は、30歳で息を引き取った。エイズがその短い命を奪った。

ナクング・エディスさんの葬儀は、簡易テントを張った自宅の庭で営まれた。参列者は約300人。しゃく熱の太陽が、家族の涙を乾かすように照りつけている。長女サラーちゃん(9)はじっとして動かない。長男アイザーちゃん(2)は母に近寄ろうとしない。二女ブレンダーちゃん(8カ月)は泣き続けた。

ウガンダの首都カンパラから車で1時間半ほどの村、ゴグゥエ。大湖ビクトリアに面した半農半漁の小さな村だ。

エディスさんは10年前、夫(35)と結婚した。貧しくても明るい夫婦に異変が起きたのは1年前。そろって、体がだるくなった。エイズの兆候だった。この時、エディスさんのおなかに、サラーちゃん、アイザーちゃんに続くブレンダーちゃんが4カ月の命を宿していた。

今年5月に入って下痢、発熱が激しくなった。しばらくすると、食物を受け付けなくなった。

その朝、付き添いの家族に「子どもの顔がみたい」と、絞り出すような声でねだった。3人の子がまくら元からのぞき込む。しかし、もう、その息は弱々しい。「元気でね。さようなら」と子どもたちにささやき、右手を小さく振って、やがて動かなくなった。

◆　◆　◆

この国で初めてエイズが確認されたのは、1982年。タンザニアとの国境に近いラカイ地方で「やせ病」と呼ばれていた病気のことだった。病魔は、またたく間に国中に広まった。内政混乱による情報不足で、予防策は後れを取った。WHO（世界保健機関）によると、最近の患者数はタンザニア約8万人、ケニア約7万人、ウガンダ約5万人。感染者は20代、30代で4人に1人にもなる。

◆　◆　◆

ひつぎが近くの墓地へ運ばれた。土中に静かに埋められたひつぎの上に、集まった人が代わる代わる砂をかける。サラーちゃんも、小さな手で砂を握った。涙がほおを伝った。

突然、泣き叫ぶ女性の声が聞こえてきた。「また、死んじゃったよう」。墓地にいた人たちは一斉に声の方向に走る。エディスさんに続き、同じ家でエイズと闘っていた妹ナカデゥ・アネットさん(22)が、息を引き取ったのだ。

親類が次々と家に入った。サラーちゃんも、それまで抱いていたブレンダーちゃんを父に預けて続く。「おばちゃんまで……」

同じ日の夕方。近くのナムエス・ドロシーさん(35)も、エイズに倒れた。

二女ジェニファーちゃん(11)と親類の子どもたちが聖書を読み上げ、賛美歌を合唱する中、その母ドロシーさんは静かに息を引き取った。

村を去る時、サラーちゃんは弱々しく手を振った。ジェニファーちゃんは泣き続けている。この子らの顔に、笑みが戻る日はいつのことか。

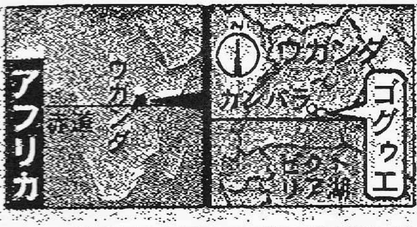
＝つづく（次回から社会面に掲載します）

◇

今年のキャンペーンでは国連機関などへの寄付に加え、ウガンダの子どもたちをエイズから救うためのプロジェクトをサポートします。救援金は左記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参下さい。

〒530—51 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係（郵便振替・00970—8—12891）

エイズに苦しむ母をなすすべもなく見守るジェニファーちゃん（左端）と同居の子どもたち ＝ゴグゥエで



交通安全

毎日新聞社と全日本交通安
「交通安全年間スローガン」を
す。交通事故防止を社会に広
ける作品をご応募ください
募、学校ぐるみの応募も歓迎
品は平成10年度の交通安全
されます。
【部門・重点テーマ】
◉一般部門（応募制限なし
（同乗者を含む）に対するもの
者への思いやり運転▽シート
用の徹底（チャイルド・シート
▽二輪車の安全運転▽運転
上◆歩行者・自転車利用者
の—▽夜間の事故防止（反射
など）▽正しい横断の励行▽
附マナーの向上
◉こども部門（小・中学生
可）▽小・中学生自身に交通
かけるもの